

森田草平

先生の文学的経歴



# 先生の文学的経歴



全体としての先生の業績の価値を批判し、先生の文学史上に於ける地位を定めると云うようなことは本書の目的ではない。そんな事はわたくし私には出来ない。又出来てもしたくない。それは宜しく後の研究者のちに委いすべきである。ただ先生の文学的経歴については、箇々の作品に入る前に一言その輪郭だけでも述べて置く必要があるように思う。

先生は学生時代から漢詩と俳句を作っておられた。殊

に俳句は熊本時代に最も盛んに作られたようだ。これは友人に子規居士があつて、その提撕ていせいに抛る所も多かつたであろうが、一つは先生自身の天性が俳句の指示するよ  
うな境地を求めずにおられなかつたからであろうとも思  
われる。私は俳句を知らない、その方の修養がないから  
余り判然はつきりしたことは云い兼ねるが、先生のは俳句を作ら  
んがために作った俳句ではない。折に触れ機に応じて心  
の行くままに自己の生活を句にしたものである。自由で  
ある。何処にも拘束される所がない。従つて専門家から  
見たら駄句として捨てべきものも多いであろうが、一た

び能く肯綮こうけいに当たれば一唱三嘆に値するものが比々としてこれある。

枕辺や星別れんとするあした晨

肩に来て人懐かしや赤蜻蛉あかとんぼ

の如きは、その時の感情が句の表に滲み出るようで、一度読んだものの永く忘れ得ない句である。が、句作に於けるこう云う傾向から見ても、永く俳句に満足される人でないことは、誰の眼にも自ずから窺われようと云うものである。

俳句や漢詩は夙はやくから作っておられたようなものの、

初めて創作に指を染められたのは先生が三十七歳の冬だ。『倫敦塔』と『吾輩は猫である』を一時じに書き出されたのがそれである。その前に『倫敦消息』と『自転車日記』の二つがあるが、これは寧ろ名の示す通り私の消息又は私の日記と云った方がいい。では、それ迄先生は創作というものに全然意を向けられなかつたと云うに、左様そうでもない。少年時代から文学に興味を持ち、文芸を以て世に立ちたいとは始終考えておられたようだ。但しそれも小説と云うような判然はつきりとした形を具えたものではない。ただ漫然と文学である。こう云うと甚だ先生にも



似合にあわしからぬことのように聞こえるかも知れないが、先生の出所、先生の素養と云うようなものから見れば、容易に肯かれることである。小説と文学とを一緒に考えるのは、西欧の文学——殊に露西亞や仏蘭西の大陸文学を見慣れたものの云うことであつて、英吉利でも小説を文学の中心とは考えていない。英吉利は矢張り詩が中心である。で、老莊の哲学を背景にした東洋趣味の素養がある上に、英吉利文学を専攻された先生が文学と小説を一緒にされなかつたのは、固もとよりその処だと云わなければならぬ。と云つて、真逆まさか新体詩でもあるまい。邦語に

は韻律がない。韻律のない国語に詩の栄えよう筈がない。新体詩は外国の詩の極めて不完全な、貧弱な模倣に過ぎない。こうなると先生のような思想を有<sup>も</sup>った人が一時俳句に踏み込まれたのも無理はない。兎にも角にも俳句は、十七字の短詩形の中に渾然たる東洋趣味を盛ることが出来るからである。が、その俳句に満足が出来なくなつたらどうするか。先生が文学を以て世に立つ覚悟をしながら、さて何をどうしようとするか。判然<sup>はんぜん</sup>たる考えを持しておられなかつたのも、蓋<sup>けだ</sup>し已むを得ない当時の事情と云わなければなるまい。で、こうした漫然たる考えを抱きな

がら、先生は伊予の松山へ赴任された。それから更に西  
熊本へ下られた。が、その間始終文学を以て立ちたい考  
えは続いていたらしい。最後に英吉利へ渡って、専門に  
文学を研究せられるようになってからは、一層その考え  
が強くなった。が、その時ですら尚何をするかと云うこ  
とは判然極はつきりまっていなかったらしい。ただ何か「人のた  
めや国のためには出来そうなものだ」と云う風に考えてお  
られたようだ。文学をやるのに、自己のためと云うこと  
よりも、先ず人のため国のためと考える所に、東洋人と  
しての先生が出ていると云わなければならぬ。

『猫』や『倫敦塔』のようなものを書き出されてからも、未だ本気に小説を書くつもりではなかったらしい。私は左様信じている。試みに先生の作をとって一つ一つ撿するに、『倫敦塔』は単なる塔の見物記ではないにしても、過去の回想録である。夢物語である。『カーライル博物館』は一層見物記に近い。『猫』は先生自身の周囲にうろろしているような、現代の人物を写实的に取り扱ったものには相違ないが、矢張り人情の裏へ廻って滑稽と諷刺の蔭に隠れたようなところがある。『倫敦塔』と同じように、舞台を過去の外国に取って物された『幻

影の盾』と『薙露行』とは、二つながら火のような恋物語ではあるが、二つとも呪いの力と云うような、超自然的要素を採り入れたもので、ロマンティックの色彩の極めて濃厚な作品である。畢竟恋を描くならロマンティックな面紗を被<sup>か</sup>けて夢の様にぼかして仕舞うか、写実的に現代の人情を取り扱うなら滑稽諷刺の裏に隠れるかして、いずれも正面から普通の人情に触れたものではない。

『琴のそら音<sup>ね</sup>』と『趣味の遺伝』とは、二つながら靈性の感応と云うような、矢張り超自然力の活動を主題に取ったものだが、これは舞台も現代で、やや普通の人情を

取り扱ったものに近い。が、『一夜』と『草枕』の二篇に到っては、遙かに又普通小説の埒外に逸している。二つとも禅の悟りと美に同化する芸術上の境地との相似を挙げて、人生に対する非人情の態度を力説したものだから、人情を取り扱うどころか、全然その反対だと云つていい。『坊ちゃん』は又人情を取り扱ったものには相違ない。人情の葛藤も出て来る。が、それでも未だどうも普通の小説とは云われぬ。普通の小説は已むを得ざる人情を取り扱うものである。が、『坊ちゃん』は已むを得る人情を取り扱っている。換言すれば、余裕のある小

説ということになるかも知れない。余裕のある小説と云う点では、『二百十日』も同様である。この作は『草枕』の人生に対する消極的態度に反して、大いに積極的態度を主張したもので、富と権勢とに対する反抗の声なども挙げられているが、全体から受ける感じから云えば、甚だしく余裕のある小説だと云わなければならぬ。先生が初めて余裕のない、切羽詰まった人情を取り扱われたのは『野分』の一篇である。余裕のない人情を取り扱われただけに、この作は又初めて論理的調子を帯おんで来た。人も知る如く、先生は嘗て反道德の作をせられたことが

ない。勿論反道徳的は材料を取り扱われたことがないと言うのではないが、決して左様そよういう傾向を肯定するような態度に出られなかった。凡てが道徳的である。道徳的に健全な作ばかりである。それにも係わらず、『野分』に到る迄の先生の作はどうも倫理的という感じに乏しかった。乏しい筈である。従来従来の先生の作は皆『猫』のような滑稽物でなければ、『草枕』のような美を主眼とした作であった。美も滑稽も倫理を超越したものである。でなければ『薤露行』のようなロマンティックな美しい作であった。畢竟、先生の作は凡て倫理的であるべく余



りに余裕のある作風であったと云ってもいい。『野分』に到って、先生は始めて倫理問題に触れられた。が、『野分』では未だその倫理問題が生のまま、概念のまま提出されている。それが具体化されて、人情の葛藤となつてあらわれたのは、『虞美人草』以後の作にあると云わなければならぬ。即ち先生は大学の講座を抛つて、純然たる職業作家として立たれた時、始めて普通の小説に筆を染められたと云うことが出来るのである。

で、それから『三四郎』『それから』『門』と云うようにだんだん書き込んで行かれたが、凡て倫理上の葛藤

を題材としたものに外ほかならない。のみならず、『虞美人草』は『野分』の引き続きとして、未だ人生哲学めいた思索が作の背景をなしているに過ぎないが、『三四郎』以後の諸作では、追々心理的な解剖や展開が作の基調をなすようになって来た。殊に『それから』は主人公の心理の委曲を尽くした点で有名な作で、心理描写と云うことは到頭作家としての先生の特長として数えられるに到った。ここに於いてか、先生は漸く小説家らしい普通の小説を書くようになられたと云っていい。その後の作は『心』『道草』から『彼岸過迄』『行人』を経て、最後

の大作『明暗』に到るまで、それぞれの特徴もあり個性もあるが、大体から見ても皆この範疇を出でない。凡て小説らしい小説である。

こうして先生は最初極めて小説らしからざる小説から這入って、だんだん小説らしい小説を書くようになってきた。この経路は先生に於いてのみ見るを得る特徴として注目し得るものである。想うに、先生のような境遇の下に、先生のような東洋流の薰陶を受けて少年時代を育って来た人は、ただ小説を書くということが何となく気後れせられるのではあるまいか。が、先生の東洋趣味に

於ける素養は啻ただにそう云う方面にばかり現れているのではない。最つと作の本質に近いものの上にも見ることが出来る。前に云った通り、先生の作には哲学的の背景もある。心理描写もある。又その論理ロジックの行やり方には、どうしても西洋流に鍛え上げた精緻な頭脳の持ち主でなければ出来ないものがある。が、それにも拘わらず、先生の作に取られた主題テーマはあくまで東洋流である。作者はどうしても東洋人だと思わせるような物がある。先生は晩年好んでアナトール・フランスの作物さくものを読んでおられた。その学者肌なところ、都会人らしい気の利いたと

ころ、仏蘭西語に所謂エスプリーに富んだところなど、若し西洋の作家に先生の匹儔ひつちゆうを求めらば、この作家などは最も先生の肌合いに近いものかも知れない。が、両者の主題テーマは全然違っている。アナトール・フランスのそれがあくまで西洋人であるのに対して、先生のは何処までも東洋人である。ここに作家として動かし難い先生の特徴があると云わなければならない。

が、東洋趣味の特質は、一層よく先生の文体の上に表れている。殊に初期の作に於いて左様そうである。わが国語は日に月に変化して、十年前ぜんの文体は最早今日の文体で

はない。この烈しい変化の末はどのようなにしても、だんだん従来の和漢文脈の表現様式が西洋文脈のそれに征服されて行くことだけはたしかである。で、このウエルデンの状態にある日本語の過渡期を代表するものとして、あの和漢文の素養がある上に、西洋文脈の表現様式を交えた先生一流の豊麗な文体は、前に往者を見ず、後に追随する者のない、唯一独特の文章として、永く国民の**什宝**とならなければならぬ。

最後に一言云って置きたいのは、わたくし私は先生の作物に接する時、何よりも先ずこんこん滾々として詞藻が湧いて出て、

汲めども汲めども尽くる所を知らないような風があるの  
に驚く。何を見ても先生は後あとが書けないと云うような心  
配気なしに書いておられる。真個まったく先生には無尽蔵の感が  
ある！ 勿論、それは前にも述べたような、和漢洋に互  
った深い素養があつて、それを我が所有としていられた  
からでもある。が、矢張り誰も云うように、その連想  
と推理の力が異常に秀でていたためである。直覚力が殆  
ど病的に発達していたためである。この点に於いて、先  
生はどうしても怪物である。不世出の怪物である！





日本文学電子図書館

---

## 文章道と漱石先生

著 者：森田草平

制作者：宮澤一郎

出版社：春陽堂

大正8年11月20日 印刷

大正8年11月30日 発行

---

日本文学電子図書館